ネガティブな経験の意味づけ方と 開示抵抗感に関する研究

松下智子¹ 九州大学

Ways of finding meaning in negative experience and hesitation in self-disclosure

Tomoko Matsushita (Kyushu University)

Narrative approach suggests that finding or creating meaning in one's own negative experience is important, and one of psychotherapeutic goals may be making it possible for the person to tell his/her in experience to others in a more positive way than otherwise. On the other hand, recent studies of self-disclosure have suggested that disclosure of negative experience could be harmful to well-being or interpersonal relationship of the person. This study investigated the relationship between ways of finding meaning in negative experiences and hesitation in self-disclosure. A questionnaire about negative life experience was administered to 210 undergraduates. Results indicated that there were four different ways of finding meaning in negative experiences, and four factors of the hesitation could be classified into those having interpersonal and intra-personal negative implications. Believing that a negative experience had negative effects on life led to stronger hesitation in self-disclosure. Interpreting a negative experience positively led to less intra-personal hesitation. And holding no hope or optimistic perspective about a negative experience led to stronger interpersonal hesitation in self-disclosure.

Key words: narrative approach, negative experience, ways of finding meaning, hesitation in self-disclosure.

The Japanese Journal of Psychology
2005, Vol. 76, No. 5, pp. 480-485

人は、生きていく中で、多かれ少なかれ辛く苦しい出来事に遭遇する。その中で、時に自分自身を責めたり、自信をなくしたり、絶望的な考え方に陥ったりすることもある。しかし、逆に、そのような経験を克服し、以前よりもいきいきと生きていけるようになることもある。

ナラティブ・アプローチでは、人は自らの経験を積極的に解釈しているととらえ、“経験”から“意味”、“意味”から“行為”へ、そして“行為”から“経験”へと循環するストーリーの存在を重視している(White, 1995)。このようなナラティブ・アプローチの立場からすると、例えば人がネガティブな経験をしたとしても、その後の本人の意味づけ方次第でその経験から受ける影響は変わるということになる。そして、その意味づけとは、個人の単なる認知のゆがみと

いうような固定的なものではなく、時間の流れや人との交流の中で変化し得るものとしてとらえられ、ストーリーは様々な人々の相互作用によって絶えず構成されていくものであると考えられている(小森・野口・野村, 1999)。以上のようなことから、臨床場面においては、人が自分のストーリーを他者に語る中で、よりよく語り直していくことが目指されている(小森他, 1999)。Pennebaker (1989)はその臨床実践の中で、外傷的経験についての感情や考えに向かい合い、それを言葉にして表明すること、つまり書いたり、話したりすることによって、それらの経験の理解を深め、新たな意味を見出すことができるとしている。

このような他者に語ることによって、経験の意味づけが変わるというナラティブ・アプローチの指摘と関連して、自己開示の研究がある。そこでは、ネガティブな経験を他者に自己開示することによって、抑うつ症状や身体症状が軽くなる(Cohen & Wills, 1985; Pennebaker & Beall, 1986)、開示した相手に受け止められることで自己価値感が高まる(Sarason, Sarason, & Pierce, 1990)、またソーシャル・サポートを他者から引き出すことができる(Coates & Winston, 1987)などの報告がなされてきた。しかし、近年では自己開

Correspondence concerning this article should be sent to: Tomoko Matsushita, Department of Clinical Psychology, Graduate School of Human Environment, Kyushu University, Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan (e-mail: tmk@eagle.ocn.ne.jp)

¹ 本論文の作成にあたり貴重なご助言を頂きました北山修教授(九州大学)、福留瑠美助教授(九州大学)に深く感謝いたします。

示することの悪影響についての報告もあり、ネガティブな経験に限っては、それを開示することは他者との関係及び自己の心理状態を悪化させる可能性もあるとしている (Costanza, Derlega, & Winstead, 1988)。

このような研究の動向から、自己開示への抵抗について積極的に取り組む研究が見られるようになった。遠藤 (1992) は、自己開示しにくい理由を“開示抵抗感”の尺度項目とし、その因子構造を検討している。遠藤によると、開示抵抗感とは“開示内容への評価にかかわる抵抗感”と“相互作用変化にかかわる抵抗感”の2次元にまとめることができると報告している。前者は、自らの内面に意識を向けて、開示内容について評価する際に生じる抵抗感の対自的側面であり、後者は、他者の視点に立って評価する際に生じる対他的側面である。また、片山 (1997) は、開示抵抗感を他者との関係には影響せず自分自身のみに影響する対自的要因と、他者との関係に影響する対他的要因とに分けて検討することの重要性を指摘している。

ネガティブな経験を開示することについて、臨床的な援助の視点からすると、開示することに適応的な意味があるか否かは重要であるが、語る側が開示することにどのような抵抗感があるのかについての理解を深めることも必要であると思われる。すなわち、自己のネガティブな経験を本人がどのように意味づけ、どのような開示抵抗感を感じているのかを知ることが、援助者にとって重要であると思われる。そこで本研究では、人が過去のネガティブな経験をどのように意味づけているのかということと、その経験を開示するにあたって、どのような抵抗感をどれほど感じるのかについて検討を行うことを目的とする。なお、意味づけ方については、ナラティブ・アプローチにおいて重視されている時間軸を考慮し (White & Epston, 1990 小森訳 1999)、過去・現在・未来の3時点からとらえる。また、開示抵抗感については、対自的-対他的要因という視点から、検討を行う。

方 法

調査対象者

4年制の大学に在籍する学生に質問紙調査を行った。分析対象者は、調査に回答した大学生男性84名 (平均年齢21.6歳, $SD=2.9$)、女性126名 (平均年齢20.5歳, $SD=2.4$) の計210名である。ただし、ネガティブな経験の意味づけ方のタイプ分類においては、意味づけ方の自由記述の欄に回答拒否もしくは記入漏れのあったものを除く178名を対象とした。その後の各タイプにおける開示抵抗感の検討では、分類されたタイプの“その他”を除く、男性65名 (平均年齢21.7歳, $SD=3.1$)、女性97名 (平均年齢20.5歳, $SD=2.6$) の計162名をその対象とした。

質問紙構成

ネガティブな経験の確定 ネガティブな経験を、“今まで生きてきた中で、辛かったり嫌だったりの経験”と定義する。対人関係でもめたこと、大事な人との別れ、病気を患ったこと、試験に失敗したこと等の具体例をあげた後に、各自で経験を一つ想起するよう教示した。経験の具体的な内容については問わないこととした。なお、ネガティブな経験を想起することができない場合や想起したくない場合には、回答拒否ができることを質問紙配布時に伝えた。また、ネガティブな経験を想起することの心理的負担に関しては、ネガティブな経験を想起した後に、同様にポジティブな経験を想起するという質問紙構成にし、さらに気分が悪くなった際には報告してもらうよう伝えるなどの倫理的配慮を行った。

ネガティブな経験の意味づけ方 “そのネガティブな経験は自分にとってどのようなものだと思うか”という教示から、ネガティブな経験の意味づけ方を問うた。具体的には、“その当時、その経験はあなたにとってどのようなものでしたか”、“現在、その経験はあなたにとってどのようなものですか”、“これから先、その経験はあなたにとってどのようなものになると思いますか”というように、その当時 (過去)・現在・これから先 (未来) の3時点に関して、それぞれ自由記述での回答を求めた。

開示抵抗感尺度 前述の教示にて想起されたネガティブな経験を、他者に話すときに生じる開示抵抗感についての32項目 (例: “話すことでますます辛くなりそうだ”, “話してみてもうまく伝わらないだろう”) を提示し、それぞれについて“とてもそう思う (4点)”から“全くそう思わない (1点)”までの4件法で回答を求めた。なお、得点が高いほど抵抗感が強くなるように得点化した。項目は先行研究 (遠藤, 1995; 片山, 1997) の開示抵抗感に関する尺度項目を、本研究での教示に合わせて一部修正した22項目と、学生30名 (男女各15名、平均年齢21.5歳, $SD=1.8$) を対象とした調査であらかじめ得られた自由記述をもとに作成された10項目からなる。その自由記述は、前述と同様の手順でネガティブな経験を想起してもらい、“そのことについて誰か他の人に話すときに抵抗を感じるとしたら、それはどのような理由からですか”という教示のもと行われた。

結 果

ネガティブな経験の意味づけ方のタイプ分類

ネガティブな出来事の意味づけ方の分類にあたっては、記入漏れのない回答が得られた178名の自由記述から、筆者がKJ法 (川喜田, 1970) を参考に五つに

Table 1
ネガティブな経験の意味づけ方に関するタイプの分類

意味づけ方タイプ(N)	各タイプにおける3時点の経験の意味づけ方		
	過去	現在	未来
苦悩継続型 (51)	辛く苦しいもの (－)	辛く苦しいもの (－)	辛く苦しいもの (－)
未来希望型 (16)	辛く苦しいもの (－)	辛く苦しいもの (－)	乗り越えていきたいもの (0・＋)
忘却楽観型 (42)	辛く苦しいもの (－)	辛く苦しいもの (－) 何ともないもの (0)	忘れていくもの (0)
成長確認型 (53)	辛く苦しいもの (－)	成長させてくれたもの (＋)	大事なものであり続ける (＋)
その他 (16)	上記以外のもの		

分類した後、分類基準を作成した。その後、分類の信頼性を確認するために、各タイプから20%のデータを無作為に抽出し、心理学を専攻する大学院生3名に、作成された基準に沿って分類を行うよう依頼した。分類における筆者と評定者3名との一致率は、それぞれ77, 81, 82%であり、平均80%であった。また、評定者間のKaplan-Goldenの全体信頼性係数は.90であった。分類において、不一致となった項目については、筆者と評定者3名が協議した上で、再分類を行った。分類基準については、KJ法の理念に従い、言葉の字面にとらわれるのではなく、そこから読み取られる意味を重視した。その結果、代表的な4タイプとして“苦悩継続型”、“未来希望型”、“忘却楽観型”、“成長確認型”が見出され、そのいずれにも当てはまらなかった少数のタイプはすべて“その他”として分類された。

各タイプについて、分類基準内容を以下に示す。“苦悩継続型”とは、過去・現在・未来にわたってネガティブな経験から否定的な影響を受け続けると意味づけているもの、“未来希望型”とは、過去と現在において否定的な影響を受けているが、未来においては乗り越えていきたいという意味づけをしているもの、“忘却楽観型”とは、過去においては否定的な影響を受けていたが現在においては何の影響も受けていないというものや、現在も否定的な影響を受けているが未来においては何の影響も受けなくなるだろうと意味づけているもの、“成長確認型”とは、過去においては否定的な影響を受けていたが、現在においてはネガティブな経験が自分を成長させてくれたと感じ、未来においても自分にとって大事なものであり続けるだろうという肯定的な意味づけをしているものである。ネガティブな経験から、自分自身が否定的な影響を受ける場合をマイナス(－)、何の影響も受けない場合をゼロ(0)、肯定的な影響を受ける場合をプラス(＋)と表記し、各タイプにおける意味づけ方をTable 1に示す。

開示抵抗感の因子分析

ネガティブな経験についての開示抵抗感に関する

32項目に対して因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果、以下の4因子が抽出された(Table 2)。累積寄与率は53.72%であった。なお、尺度の信頼性を検証するため、Cronbachの α 係数を求めたところ、第1因子.8116、第2因子.8352、第3因子.8060、第4因子.6592であった。

第1因子は、“話すことでその事実を再確認しそうで嫌だ”、“話すことでますます辛くなるだろう”、“話すことで、改めて自分がそのことに強い影響を受けているのだと認識しそうで嫌だ”等の項目の因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は、話すことによって心理的に傷つくことを表していると解釈されたので“直面化傷つき因子”と命名された。

第2因子は、“こんなことを話すと、相手から嫌われそう”、“こんな話をすると、相手が自分と距離をおくようになりそう”、“相手から悪いイメージで見られるようになるだろう”等の項目の因子負荷量が高かった。これらの内容は、他者からの否定的な評価を懸念しているものと解釈されたので、“他者評価懸念因子”と命名された。

第3因子は、“そのことを話す自分は格好悪い”、“そのことを話す自分は情けない”、“話した後、自分自身がダメな人間に思えそう”等の項目の因子負荷量が高く、これらの内容は、話をする自分に対して否定的な評価を自ら下すことを表していると解釈されたので、“否定的自己評価因子”と命名された。

第4因子は、“相手が内容をきちんと理解してくれないだろう”、“話してみても相手にうまく表現できないだろう”、“愚痴っぽく聞こえてしまうだろう”等の項目の因子負荷量が高く、その内容は相手にうまく伝えられないことを表すものと解釈されたので、“伝達困難性因子”と命名された。

なお、これらのうち、第1因子の“直面化傷つき因子”と第3因子の“否定的自己評価因子”は、開示者自身に関連する抵抗感であるため、対自的要因であると言える。一方、第2因子の“他者評価懸念因子”と第4因子の“伝達困難性因子”は、他者との関係に関連する抵抗感であるため、対他的要因であるとみなさ

Table 2
開示抵抗感尺度の因子分析の結果

項目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
1. 話すことでその事実を再確認しそうで嫌だ	0.74	0.11	0.22	0.16
2. 話すことでますます辛くなるだろう	0.73	0.22	0.12	0.10
3. 話すことで、改めて自分がそのことに強い影響を受けているのだと認識しそうで嫌だ	0.66	0.09	0.18	0.21
4. 話すとき尾を引いて立ち直れないだろう	0.63	0.25	0.13	0.20
5. こんなことを話すと、相手から嫌われそう	0.07	0.84	0.07	0.05
6. こんな話をすると、相手が自分を距離を置くようになりそう	0.11	0.76	0.13	0.25
7. 相手から悪いイメージで見られるようになるだろう	0.23	0.64	0.17	0.21
8. その話に対する相手の評価が心配になる	0.22	0.42	0.25	0.20
9. そのことを話す自分は格好悪い	0.17	0.13	0.86	0.07
10. そのことを話す自分は情けない	0.28	0.20	0.74	0.13
11. 話した後、自分自身がダメな人間に思えそう	0.35	0.35	0.43	0.27
12. 相手が内容をきちんと理解してくれないだろう	0.17	0.11	0.01	0.65
13. 話してみても相手にうまく表現できないであろう	0.18	0.17	0.12	0.63
14. 愚痴っぽく聞こえてしまうだろう	0.01	0.08	0.18	0.45
15. 相手が分かってくれないとその人のことを嫌いになってしまいそうで嫌だ	0.22	0.15	-0.01	0.40
寄与率(%)	33.70	8.42	6.61	4.98
累積寄与率(%)	33.70	42.12	48.74	53.72

れた。

ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感の関連

意味づけ方 4 タイプにおける開示抵抗感 ネガティブな経験の意味づけ方と、その経験に対する開示抵抗感の関連を検討した。意味づけ方の“その他”を除いた 4 タイプを独立変数、開示抵抗感尺度の全項目の平均得点から算出された“開示抵抗感得点”を従属変数とした、一元配置分散分析を行った。下位検定は Tukey 法を用いた。

その結果、ネガティブな経験の意味づけ方 4 タイプによる有意な主効果が見られた ($F(3, 158) = 11.75, p < .001$)。下位検定では、“苦悩継続型”が、“忘却楽観型”と“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高く (順に、 $p < .01, p < .001$)、また同様に、“未来希望型”が、“忘却楽観型”と“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった (順に、 $p < .05, p < .01$)。

意味づけ方 4 タイプにおける開示抵抗感の下位因子ごとの比較 ネガティブな経験の意味づけ方によって、開示抵抗感の下位因子ごとの得点において違いが見られるかを調べるために、下位因子ごとに平均得点を求め、それぞれ“直面化傷つき因子”得点、“他者評価懸念因子”得点、“否定的自己評価因子”得点、“伝達困難性因子”得点とした。意味づけ方の 4 タイ

プを独立変数、下位因子ごとの平均得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。

その結果、下位因子ごとの平均得点において、それぞれネガティブな経験の意味づけ方 4 タイプによる有意な主効果が見られた (順に $F(3, 158) = 12.00, p < .001; F(3, 158) = 4.72, p < .01; F(3, 158) = 6.74, p < .001; F(3, 158) = 4.51, p < .01$)。“直面化傷つき因子”得点の下位検定では、“苦悩継続型”が、“成長確認型”よりも有意に得点が高く ($p < .001$)、“未来希望型”が、“忘却楽観型”と“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高く (順に、 $p < .05, p < .001$)、また“苦悩継続型”が“忘却楽観型”よりも得点が高く ($p < .08$)、“忘却楽観型”が“成長確認型”よりも得点が高い ($p < .08$) という傾向が見られた。“他者評価懸念因子”得点では、“苦悩継続型”が、“忘却楽観型”と“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった (順に、 $p < .05, p < .01$)。“否定的自己評価因子”得点では、“苦悩継続型”が、“成長確認型”よりも有意に得点が高く ($p < .01$)、“未来希望型”が、“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった ($p < .01$)。“伝達困難性因子”得点では、“苦悩継続型”が、“忘却楽観型”と“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった (ともに、 $p < .05$)。

考 察

本研究では、ネガティブな経験の意味づけ方と、その経験に対する開示抵抗感との関連を検討した。

ネガティブな経験の意味づけ方について、過去・現在・未来にわたる時間軸による変化から、“苦悩継続型”、“未来希望型”、“忘却楽観型”、“成長確認型”の代表的な 4 タイプが見出された。能智 (1999) は、頭部外傷者における語りを質的に分析した中で、頭部外傷者がストーリーを構築する際の型を、頭部外傷と自分の関係をどのように定義しようとしているかという視点から考察し、“頭部外傷にもかかわらず、自分は大丈夫なんだ”という障害を否定して自分から排除する方向と、“頭部外傷のゆえに、自分はこんな風であり得るんだ”という障害を自分に取り込みつつ肯定する方向があると述べている。本研究で得られた 4 タイプの意味づけ方をこのような方向性から見直すと、“忘却楽観型”がネガティブな出来事を意図的に排除する、または自然に忘却する方向、“成長確認型”がネガティブな出来事を自分に取り込みつつ肯定する方向に向っており、“苦悩継続型”と“未来希望型”はどちらの方向にも進む可能性があると言える。

また代表的な 4 タイプには入らなかったが、“その他”に分類された中には、その当時は辛くなかったが現在辛くなったというものや、現在は肯定的なものと意味づけているが今後は否定的なものとなるかもしれないというものなども少数ではあるが見受けられ、意味づけ方が否定的なものから肯定的なものへと直線的に進まない場合もあることがうかがえた。ネガティブな経験の意味づけ方は、個人によって異なることは言うまでもないが、同じ人の中でも様々に変化し得るものであることが示唆された。

次に、ネガティブな経験を他者に話す時の開示抵抗感について因子分析を行ったところ、“直面化傷つき因子”、“他者評価懸念因子”、“否定的自己評価因子”、“伝達困難性因子”の 4 因子が見出された。これらのうち、“直面化傷つき因子”と“否定的自己評価因子”は対自的要因であり、“他者評価懸念因子”と“伝達困難性因子”は対他的要因である。これらの結果は先行研究の結果 (遠藤, 1995; 片山, 1997) とほぼ一致しているが、若干異なるところも見られた。片山 (1997) は、相手に話すことでよい効果が得られることを否定する項目からなる因子を“無効性因子”と命名し、対自的要因とみなしているが、本研究では、“相手が内容をきちんと理解してくれないだろう”などの相手に話してもよい効果が得られないことに関する項目は、“愚痴っぽく聞こえてしまうだろう”、“相手が分かってくれないとその人のことを嫌いになってしまいそうで嫌だ”というような、話すことによって相手との関係が悪くなることを懸念する項目と同一の

因子として見出されたため、“伝達困難性因子”と命名し、対他的要因とみなした。この点については、質問項目の違いとともに、対自・対他的要因についてより詳細に検討する必要があると考えられる。

ネガティブな経験の意味づけ方のタイプによって、開示抵抗感は異なることが示唆された。“苦悩継続型”・“未来希望型”は、“忘却楽観型”・“成長確認型”よりも有意に開示抵抗感得点が高かった。このことから、ネガティブな経験が現在も自分自身に否定的な影響を与え続けていると感じている場合には、全般的な開示抵抗感を強く感じるということが示唆された。ネガティブな経験を意図的に排除する、または自然に忘却する方向や、自分に取り込みつつ肯定する方向に向かった場合には、全般的な開示抵抗感は低くなっていると言えよう。この結果は、もともと開示抵抗感が強い人は、自己開示を行わないために、意味づけ方が否定的なもののみで変化していらず、開示抵抗感が低い人は、自己開示を行ってきたために、意味づけ方が変化してきた、とも解釈され得る。いずれにせよ、ネガティブな経験が自分自身に否定的な影響を与え続けていると感じ、開示抵抗感を強く感じている人は、悪循環の渦の中に入ってしまった可能性があり、ここに、ナラティブ・アプローチで言うところの、“円環性の存在” (小森他, 1999)、すなわち“経験”から“意味”、“意味”から“行為”、そして“経験”へとつながる連鎖がうかがえるのではないだろうか。

ネガティブな経験の意味づけ方のタイプによって、開示抵抗感の下位因子それぞれの感じられ方は異なることが示唆された。“直面化傷つき因子”得点では、“苦悩継続型”が“成長確認型”よりも、また“未来希望型”が“忘却楽観型”・“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった。“他者評価懸念因子”得点では、“苦悩継続型”だけが“忘却楽観型”と“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった。“否定的自己評価因子”得点では、“苦悩継続型”・“未来希望型”が“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった。“伝達困難性因子”得点では、“苦悩継続型”だけが“忘却楽観型”と“成長確認型”よりもそれぞれ有意に得点が高かった。“直面化傷つき因子”と“否定的自己評価因子”を開示抵抗感の対自的要因、“他者評価懸念因子”と“伝達困難性因子”を対他的要因とみなせば、ネガティブな経験を忘却する方向、もしくは、肯定的な方向へ意味づけている場合は、そうでない場合に比べ、対自的な抵抗感は低く、将来に対する希望や楽観的な見通しを持てず、ネガティブな経験が自分自身に否定的な影響を与え続けると意味づけている場合には、そのことを話す際、対他的な抵抗感を強く感じると言えよう。このように、開示抵抗感の対自・対他的要因において、それぞれ異なる結果が得られたことは、片山 (1997) の示唆を支持す

るものであった。今後も、それらを分けて検討する必要があると言える。

従来の研究では、自己開示を引き出しやすくするにはどうしたらいいかというものが主流であり (Altman & Taylor, 1973; Berg, 1987), その文脈の中で、遠藤 (1995) は開示しにくい理由、つまり開示抵抗感の内容を知ることの重要性を示唆した。また、片山 (1997) は、否定的な内容を開示することによる自己の傷つきを指摘し、自己開示を回避することの積極的意味を提示した。本研究では、開示者の置かれている状態をより詳細に理解するため、ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感の関連を検討した。その結果、対自的な抵抗感には、ネガティブな経験を忘却する方向、もしくは肯定的に意味づけている場合に低くなっており、対他的な抵抗感には、その経験に対して将来の希望や楽観的な見通しを持つ場合に低くなっていることが示唆された。ネガティブな経験を開示していく方向、もしくは開示しないでおく方向のどちらが開示者の心理状態に関して適切かについては、開示者自身がその経験をどう意味づけ、どのような開示抵抗感を持つのかを検討することが重要であると考えられる。そのことについて、開示者と被開示者がともに話し合うことが、援助的なかかわりにつながるのではないだろうか。例えば、開示者の過度の遠慮や憶測からくる開示抵抗感には、話し合うことで減じることができるであろうし、開示者がどうしても話したくないと感じている部分については、詳細まですべて話さなくてもよいことを伝え、ネガティブな経験の取り扱い方をともに工夫していくことができるであろう。

最後に本研究における限界を2点述べる。第1に、本研究では、プライバシーの問題などを考慮して、ネガティブな経験の内容については一切問わなかった。しかし、経験の内容や重要性の違いによって意味づけ方に一定の傾向が見られる可能性はあり、検討の余地が残る。第2に、本研究では、大学生を対象に研究を行っているが、対象の発達段階によっては、開示抵抗感の感じられ方が異なるかもしれない。これらの点については、本研究で得られた知見とともに、今後より詳細な検討を行っていく必要がある。

引用文献

- Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Berg, J. H. (1987). Responsiveness and self-disclosure. In V. J. Derlega & J. H. Berg (Eds.), *Self-disclosure: Theory, research, and therapy*. New York: Plenum Press. pp. 101-130.
- Coates, D., & Winston, T. (1987). The dilemma of distress disclosure. In V. J. Derlega & J. H. Berg (Eds.), *Self-disclosure: Theory, research, and therapy*. New York: Plenum Press. pp. 229-255.
- Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357.
- Costanza, R. S., Derlega, V. J., & Winstead, B. A. (1988). Positive and negative forms of social support: Effects of conversational topics on coping with stress among same-sex friends. *Journal of Experimental Social Psychology*, **24**, 182-193.
- 遠藤公久 (1992). 自己開示における内面性の判断基準について——開示抵抗感の視点から—— 日本社会心理学会第33回大会発表論文集, 306-309. (Endo, K.)
- 遠藤公久 (1995). 自己開示における抵抗感の構造カウンセリング研究, **28**, 47-57. (Endo, K. (1995). The structure of hesitation in self-disclosure. *Japanese Journal of Counseling Science*, **28**, 47-57.)
- 片山美由紀 (1997). 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, **67**, 351-358. (Katayama, M. (1997). The relationship between self-esteem and self-disclosure of negative information. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 351-358.)
- 川喜田次郎 (1970). 続・発想法——KJ法の展開と応用—— 中公新書 中央公論社 (Kawakita, J.)
- 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編著) (1999). ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社, pp. 3-13. (Komori, Y., Noguchi, Y., & Nomura, N.)
- 能智正博 (1999). 障害者における自己の捉え直しとしてのライフストーリー——語りの教育心理学—— 発達, **20**, 49-57. (Nouchi, M.)
- Pennebaker, J. W. (1989). Confession, inhibition, and disease. *Advances in Experimental Social Psychology*, **22**, 211-244.
- Pennebaker, J. W., & Beall, S. K. (1986). Confronting a traumatic event: Toward an understanding of inhibition and disease. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 274-281.
- Sarason, B. R., Sarason, I. G., & Pierce, G. R. (1990). Social support: The search for theory. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **9**, 133-147.
- White, M. (1995). The narrative perspective in therapy. In M. White (Ed.), *R-authoring lives: Interviews & essays*. Adelaide, South Australia: Dulwich Centre Publications.
- White, M., & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends*. Adelaide, South Australia: Dulwich Centre Publications. (ホワイト, M., エプストン, D. 小森康永 (訳) (1999). 物語としての家族 金剛出版)